

報道 「陽春を飾る上野の美術展」

『東京毎夕新聞』 昭和十三年四月十八日付



春の美術シーズンを華々しく飾る春陽会の第十六回展と国画会の第十三次回展、それに公認表装師組合の第十六回表装展並に今年旗上げ展を開いた新院展の四つはいま上野公園の東京府美術館で満都の美術ファンを集めて

ある

「浮ついた色彩」 K.O (ノックアウト)
展覧会見るのも御奉公…と
美術家もファンも戦時体制下

戦時体制下の美術展覧会は戦時特別税法の入場税を課されることになったので、展覧会を観るのも御奉公の一つと云ふ一般鑑賞家意識が濃厚に反映して、春陽会も国画会も新院展も表装展も入場者は多く、各展覧会主催団体もこれで幾分でも国家へ御奉公出来ると大喜びである。各展覧会を見ると、

春陽会 は全体から見て、その創立当初から比較すると暗い渋い色彩の絵とやや稍グロ味を帯びた構成の作品が多くなつたやうに見える。これは春陽会創立当初の会員が段々後退して、若手が第一線に立つて仕事をやる結果であらうが、又一面から見れば現代洋画の表現様式傾向が段々と明るい外光の魅力から遠ざかつて、ものの内部に深く入つてそのまじ眞を描かうとするやうになつて来たことを物語るかにも見える。

それに一方では何と云つても、支那事変と云ふ非常時下の国民の心境が絵画の上にも自然に現はれて浮ついた色彩によつて観者を眩惑しやうとする浮ついた調子を拝すると云つたやうな感じが、不知不識の間に美術家の

頭へコビリ着いたためであるとも云へやう。

油絵の中では足立源一郎氏の《雪の朝(十勝岳麓)》以下五点が一番明るい作で、水谷清氏の作は中庸を得て居り、鳥海青児氏は暗くグロ味の多いものである。今年是小杉放庵氏の墨画が出ず、倉田白羊氏の出品もないのが寂しいが、石井鶴三氏の《レヴュー》や、木村莊八氏の《夜の宿》、それに莊八氏と鶴三氏の挿絵原画があるので春陽会への魅力は多く其処に集められてゐる。但し若き観賞家は、或は鳥海氏あたりの作品に対し礼賛するかも知れない。

*春陽会の他、国画会、表装展、新興美術院展 紹介(省略)